okayama
art summit
2022

岡山芸術交流2022

DO WE DREAM UNDER THE SAME SKY

2022.9.30（FRI）–
11.27（SUN）

Outline of Exhibition

version 1.0

JP

岡山芸術交流2022
Okayama Art Summit 2022

Do we dream under the same sky
僕らは同じ空のもと夢をみているのだろうか
2022年9月30日（金）ー11月27日（日）

「岡山芸術交流」は、岡山市で3年ごとに開催される国際現代美術展です。 「岡山芸術交流2022」には、アーティスティックディレクターとしてリクリット・ティラヴァーニャ をむかえ、 2022年9月30日から11月27日の2ヶ月間、 岡山城・岡山後楽園周辺エリアの様々な歴史文化施設を会場に開催します。 展示作品を見るただけではなくアーティストの思考に遭遇し、時間や歴史、国境などを 行き来するような芸術との交流を、ここ岡山でお愉しみください。

参加作家数：28組（13カ国）

アーティスティックディレクター／アーティスト
リクリット・ティラバーニャ Rirkrit Tiravanija

アーティスト
Artist

ラゼル・アハメド
Rasel Ahmed

アート・レーバーとジャライ族のアーティストたち
Art Labor in collaboration with Jrai artists

王兵（ワン・ビン）
Wang Bing

ダニエル・ボイド
Daniel Boyd

リジア・クラーク
Lygia Clark

アブラハム・クルズヴィエイガス
Abraham Cruzvillegas

円空
ENKU

池田亮司
Ryoji Ikeda

片山真理
Mari Katayama

ミー・リン・ル
My-Linh Le

デヴィッド・メダラ
David Medalla

アジフ・ミアン
Asif Mian

プレシャス・オコヨモン
Precious Okoyomon

フリーダ・オルパボ
Frida Orupabo

ヴァンディー・ラッタナ
Vandy Rattana

バルバラ・サンチェス・カネ
Bárbara Sánchez-Kane

笹本晃
Aki Sasamoto

ジャコルビー・サッターホワイト
Jacolby Satterwhite

島袋道浩
Shimabuku

曽根裕
Yutaka Sone

アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul

梁慧圭（ヤン・ヘギュ）
Haegue Yang

イベント
Event

ペパーランド
PEPPERLAND

ゲルト・ロビンス
Gert Robijins

グループ
Group

オーバーコート
OVERCOAT

伊勢﨑州（備前焼）・スミス 一三省吾・木口 ディアンドレ（烏城彫）
Shu Isezaki（Bizen）・Smith Ethan Shogo・De'Andre Kiguchi（Ujo Bori）

パフォーマンス
Performance

Untitled Band (Shun Owada and friends)

開催概要

■名称
岡山芸術交流2022
（英）Okayama Art Summit 2022

■タイトル
Do we dream under the same sky
僕らは同じ空のもと夢をみているのだろうか

■会期
2022年9月30日（金）〜 同11月27日（日）［51日間］

■休館日
月曜日休館（10月10日（月・祝）は、翌日の火曜日休館）

■開催時間
9:00〜17:00（入館は16:30まで。但し、個別会場における変動あり）
※一部、開催時間が異なる施設がありますので、公式ウェブサイト等で確認をお願い致します。

■展示会場
旧内山下小学校
岡山県天神山文化プラザ
岡山市立オリエント美術館
シネマ・クレール丸の内
林原美術館
岡山後楽園
岡山神社
石山公園
岡山城
岡山天満屋

■運営組織
主催：岡山芸術交流実行委員会（岡山市・公益財団法人石川文化振興財団・岡山県）
会長：大森 雅夫（岡山市長）
副会長：横田 有次（岡山県副知事）松田 久（岡山商工会議所会頭）
総合プロデューサー：石川 康晴（公益財団法人石川文化振興財団理事長）
総合ディレクター：那須 太郎（TARO NASU 代表 / ギャラリスト）
アーティスティックディレクター：リクリット・ティラヴァーニャ（アーティスト）
パブリックプログラムディレクター：木ノ下 智恵子（大阪大学21世紀懐徳堂准教授）
デザインディレクター：川上 シュン（artless Inc. 代表）
顧問：和氣健（岡山市議会議長）　槇野博史（国立大学法人岡山大学学長）
　　宮長雅人（株式会社中国銀行取締役会長）

■構成団体
岡山市、岡山市教育委員会、岡山県、岡山商工会議所、公益社団法人おかやま観光コンベンション協会、岡山カルチャーゾーン連絡協議会、大学コンソーシアム岡山、株式会社山陽新聞社、RSK山陽放送株式会社、岡山放送株式会社、テレビせとうち株式会社、公益社団法人岡山県バス協会、一般社団法人岡山県タクシー協会、西日本旅客鉄道株式会社、井上公認会計士事務所、株式会社中国銀行、公益財団法人岡山文化芸術創造、公益財団法人石川文化振興財団

■事業構成

①現代アート展

本国際現代美術展のテーマを体現する現代アート作品の制作及び展示を行う。
アーティストの選考は、総合ディレクター、アーティスティックディレクターが行います。

②パブリックプログラム

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、
市民・県民が展覧会により親しんでもらうための各種プログラムを実施。
展覧会への来場のきっかけづくりとしての役割も担うプログラムとして、本展会場以外の場所においても広く開催します。

③学校連携／地域連携

［学校連携］
コンセプトの1つ「人を育む」の観点に立ち、岡山の未来を担う児童及び生徒が芸術作品に触れる機会を 増加させるとともに、岡山芸術交流2022が想像力や感受性をより豊かにする一助となることを目的とし、 県内の教育機関に対する綿密な事前周知や「出前講座」を実施します。

小・中学校、高校の校外学習・部活動等の鑑賞連携
本展への県内来場予定校...95校、約7,000名(前回:76校、約4,800名)
市内小・中学校の出前授業実施校...7回

［地域連携］
市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促すため、 地域へ向けた説明機会を設けることで一層の浸透を図ります。

地元公民館への出前講座やアートツアー等を実施します。

ロゴマーク

デザイン：
ピーター・サヴィル　Peter Savill

1955年、イギリス・マンチェスター生まれ。イギリスを代表するグラフィックデザイナーで、1970年代から80年代にかけて手がけた、マンチェスターのインディペンデント・レコード・レーベル「ファクトリー・レコーズ」のジャケットのデザイン（特にジョイ・ディヴィジョン、ニュー・オーダーなど）で広く知られる。その活動は音楽関連に止まらず、アドビシステムズ、ＣＮＮ、ジバンシィなどイギリス国内外の有名企業のデザインも手がける。アーティストとしても活動しており、「岡山芸術交流2016」では、アナ・ブレスマン（Anna Blessmann ：1969年ドイツ・ベルリン生まれ）とのアーティストユニットとして、旧後楽館天神校舎会場にて「触れる作品」（Touching Work）を展示、子どもたちを中心に人気の作品となった。

デザインコンセプト：
オーケー(いいね)、岡山。
オーケー(いいね)、岡山芸術交流。

今や世界の共通言語であるオーケー。いいね、を意味する、その2文字の形と音を「オカヤマ」の英語表記と音に重ねたのが今回のロゴデザインです。オーケーという記号が表す肯定の姿勢を、岡山と岡山芸術交流に反映させ、ロゴデザインを目にした人に岡山への興味、岡山芸術交流への賛同を促す。
さらにこのデザインは、デザイナーであるピーター・サヴィルの個性、クールでシンプルなサヴィルらしさをあますところなく発揮しているのも注目点。サヴィル自身の世界的な知名度とあいまって、国際社会においても普遍的かつ認知度の高いロゴデザインとなることを期待している。

Do we dream under the same sky
僕らは同じ空のもと夢をみているのだろうか

疑問文としてすべての要素を備えていながらも文末に疑問符のないこのセンテンスは、アイディアの入り口にしかすぎません。

この数年間、世界的パンデミックに加え、アメリカ国内の白人至上主義や世界各地のナショナリスト的ポピュリストの趨勢が強まってきたという背景を踏まえて、私はこの展覧会を私たちの意識や視点を変革するものにしたいと考えています。

こうしたさまざまな思いを巡らし、岡山芸術交流 2022 についてはできれば、旅人という共通の 背景を持つアーティストの周辺的な活動に特に集中したいと考えています。旅人、というのは、選定されたアーティストのほとんどが異質な文化的あるいは社会的背景を持っているという意味です。彼らの多くが、活動や制作拠点を西洋の芸術的ヘゲモニーの中心に置きながらも、その(西洋的)ヘゲモニーの中での自らの位置づけにおいては、西洋以外の立場からのアイデンティティが根底にあります。彼らの人生と歴史は、西洋との違いによって形作られているのです。

ここでいう夢は、違いのある空や、多元性のある空で見る夢、つまり、西洋的規範の周縁にある物語表現の中で見る夢を意味しています。私たち(参加者と鑑賞者)からすると自らが規範的とみなす世界の外にある表現を経験するということです。言い換えると、物語や人生、そして考え方、見方、聞き方、あり方、さらには希望、野心、そして日常の中で心を動かされるような夢を超えた存在の仕方に対して、 私たちの目を開かせてくれる夢を意味しています。

岡山芸術交流 2022
アーティスティックディレクター
リクリット・ティラヴァーニャ

アーティスティックディレクター

リクリット・ティラヴァーニャ
Rirkrit Tiravanija

リクリット・ティラヴァ―ニャ1961年、アルゼンチン、ブエノスアイレス生まれ。
タイ人アーティストであるティラヴァ―ニャは、料理や食、読書といった日常的な行為の共有を通じて観客と交流する場を設け、従来の展示形式をくつがえす表現で知られる。芸術作品の優位性を否定し、作品の使用価値および単純な行為と助け合いによって人と人を結び付ける空間を構築することで、労働やアート鑑賞の在り方に挑む。現在、米・コロンビア大学芸術大学院教授を務める。アーティスト・美術史家・キュレーターによる共同プロジェクト「UtopiaStation」創設メンバーであり、キュレーター。また、タイのチェンマイ近郊にある教育および環境保全プロジェクト「The LandFoundation」の設立にも携わる。

Photo by Pauline Assathinay

Rirkrit Tiravanija, Untitled 2017 (Oil Drum Stage)
Tommy Simoens, Antwerp / Jonas Lampens

［アーティスト］

ラゼル・アハメド
Rasel Ahmed

1990年、バングラデシュ、ダッカ生まれ。現在はオハイオ州コロンバスを拠点に活動。
伝統的な映画表現や技法を使い、記録映像と空想的表現を融合させた作品を制作。参加型ドキュメンタリーやアーカイブリサーチのほか、共同制作による再現映像を駆使した役者の演技や動きの設定を特徴とする。バングラデシュ初となるLGBTQの雑誌の編集者および共同創設者としての経歴を持ち、2016年に同誌の発行人がバングラデシュで襲撃されたのを受け、国外へ避難。彼の実験的な映像作品は、彼自身の国外移住や市民権、国境、孤独との対話関係を追求する一つの手法となっている。
作品はこれまでに、Marli Matsumoto Arte Contemporânea（サンパウロ）、オハイオ州立大学のウェクスナー芸術センター（オハイオ）、レンフェスト・センター（ニューヨーク）、ホプキンス・ホール・ギャラリー（オハイオ）、国立民主研究所（アメリカ）、ヒューマン・ライツ・キャンペーン財団（アメリカ）など、多数の芸術祭やギャラリー、コミュニティ／団体施設などで展示されている。主な受賞・レジデンス・助成歴に、キャッツキル・アーティスト・レジデンシー、UnionDocsサマーラボ、Avijit Roy Courage Award、Atlas Corpsフェローシップなど多数。現在、地域に根ざしたクィアの歴史を記録するアーカイブ活動を主宰するほか、オハイオ州立大学舞台芸術・映画・メディアアーツ科にて助教を務める 。

Video StillFilm: Who Killed Taniya　Credit: Rasel Ahmed

［アーティスト］

アート・レーバーとジャライ族のアーティストたち
Art Labor in collaboration with Jrai artists

ベトナム・ホーチミン市を拠点とするタオ・グエン・ファン（Thao Nguyen Phan）、チュオン・コン・トゥン（Truong Cong Tung）、アルレット・クイン=アイン・チャン（ArletteQuynh-Anh Tran）の三人によるアーティストグループ。
様々な公共的文脈や場所にアプローチしながら、ビジュアルアーツや社会／自然科学の中間地点で活動する。単体としての作品ではなく、数年をかけて一つのインスピレーションを種にアイデアを育んでいくスタイルを展開。種が成長することで、発想が広がり、やがてプロジェクトや作品という《根》を張っていく。これまで手がけたプロジェクトに「Unconditional Belief」（2012年〜2015年)、「Jrai Dew」（2016年〜）、「JUA」（2019年〜）など。主な展示に、2021年Paradise Kortrijk,Triennial forContemporaryArt（ベルギー・コルトレイク）、2018年の第57回カーネギー・インターナショナル（アメリカ・ピッツバーグ）、2018年バンコク・アート・ビエンナーレ（タイ）、2018年ダッカ・アート・サミット（バングラデシュ）、2018年パラ-サイト（香港）、2018年ワルシャワ近代美術（ワルシャワ）、2017年「Cosmopolis #1: Collective Intelligence」ポンピドゥー・センター（パリ）、2017年アジア・アート・ビエンナーレ（台湾）、2017年「Salt of the Jungle」KF Gallery（韓国）、2016年〜2017年「Jrai Dew Sculpture Garden」（ベトナム・中部高原地帯）、2015年「The Adventureof Color Wheel」ホーチミン市眼科病院小児科（ホーチミン）、2014年「UnconditionalBelief」Sàn Art（ホーチミン）など、ベトナム・海外で多数紹介されている。

researchphotograph of the sonic system created by theJrai community in the CentralHighland, Vietnamv2021
Photo by Truong Cong Tung

［アーティスト］

王兵（ワン・ビン）
Wang Bing

1967年、中国陝西省西安生まれ。現在はフランスと中国を拠点に活動。1992年、瀋陽の魯迅芸術大学写真専攻を卒業。制作のため、鉄西工場で働く労働者を長期にわたって観察し撮影を続けた。1995年、北京電影学院に入学。テレビ局勤務の経験を経て、1998年から映画監督としての活動を開始。2002年に撮影した初のドキュメンタリー映画「鉄西区」は数々の賞や助成金を獲得した。ワン・ビンの映像作品は、近年の中国の経済変革から排除された人々を無二の美しさと妥協のない厳粛さをもって鮮やかに描き出す。登場人物の人生の一瞬、そのはかなさを寓話に転換しようと試みることで、美しくまた悲哀に満ちた、心を揺さぶる映画を作り出している。歴史の深い考察と、止めようのない現代中国の発展がもたらす矛盾と苦悩を打ち出し、観察とリアリティを極限まで追及し、映像に昇華している。
2009年、パリのギャラリー・シャンタル・カルーセルで初の個展を開催し、ドキュメンタリー映画「鳳鳴」と「名前のない男」を上映。以来、「三姉妹〜雲南の子」（2012年）、「タアン」（2016年）、「石炭、金」（2009年）をはじめ、2017年にアテネとカッセルのドクメンタ14で上映された「ファンさん」（2017年）、「15時間」（2017年）、「Beauty lives in Freedom」（2018年）など多くのドキュメンタリーを制作している。2018年から2019年にかけて、ル・フレノア国立現代芸術スタジオ（フランス）の客員アーティスト／教授を務める。2017年、「ファンさん」でロカルノ国際映画祭（スイス）最高賞の金豹賞を受賞。同年、これまでの作品実績が評され、EYE Art & Film 賞を受賞（アムステルダム）。主な個展に、2021年 LE BAL（パリ）、2018年〜2019年クンストハレ・チューリッヒ（チューリッヒ）、2016年カリフォルニア美術大学ワティス・インスティトゥート（サンフランシスコ）、2014年ポンピドゥー・センター（パリ）など。2018年には、マドリードのソフィア王妃芸術センターとFilmoteca Españolaで大規模な回顧展が開催された。グループ展に、2021年マルタ・ヘルフォルト（ドイツ・ヘルフォルト）、2020年織物博物館（ワシントンD.C.）、2019年ボードイン大学美術館（アメリカ・メイン）、2017年Bi-City Biennale of Urbanism/Architecture（深圳）、2017年Brunswick Centre Culturel de Strombeek（ベルギー・ブリュッセル）、2015年全州国際映画祭（韓国、全州）、2014年上海ビエンナーレ（上海）、2010年Filmmaker Festival（ミラノ）などがある。 これまでに、ソフィア王妃芸術センター（マドリード）、M+（香港）、ポンピドゥー・センター（パリ）、アテネ国立現代美術館EMST（アテネ）、国立造形センターCNAP（パリ）に作品が収蔵されている。

Wang Bing
Fengming, chronique d'une femme chinoise, 2009
Film 16/9 HD transferred to DVD, colour, sound 3h47min
Edition of 6 + 2 AP
Courtesy of the artist and Galerie Chantal Crousel, Paris

［アーティスト］

ダニエル・ボイド
Daniel Boyd

1982年、オーストラリア、ケアンズ生まれ。現在はシドニーを拠点に活動。
時間、空間、文化、個人的体験の複数性に関する作品制作を行う。ボイドの絵画、映像、インスタレーション作品は私的でありながら同時に歴史的、形而上学的広がりを持ち、私たちが個人あるいは集団として文化的・個人的記憶を構築する際にともなう複雑な視点を掘り下げている。
キュレーターにコスミン・コスティナス、共同キュレーターにシーラーシャ・ラジバンダリとヒットマン・グルンを迎えたカトマンズトリエンナーレ2077（2022年、ネパール）や、オクウィ・エンヴェゾーがキュレーターを務めた第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2015年）、ボゴシアン財団主催、ハンス・ウルリッヒ・オブリストとアサド・ラザがキュレーションを手がけた「Mondialité」ヴィラ・アンパン（2017年、ブリュッセル）、デイヴィッド・エリオットがキュレーターを務めたモスクワ国際ヤングアート・ビエンナーレ（2014年）、クイーンズランド州立美術館で開催された第7回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（2012年、オーストラリア）、ジティッシュ・カラットがキュレーターを務めたコチ=ムジリス・ビエンナーレ（2014年、インド・コチ）、ブレンダ・L・クロフトがキュレーションを務め、オーストリア国立美術館で開催されたNational Indigenous Art Triennial（先住民アート・トリエンナーレ、2007年、オーストラリア・キャンベラ）、イソベル・パーカー・フィリップおよびエリン・ヴィンクがキュレーターを務めた「Treasure Island」ニューサウスウェールズ州立美術館（2022年、シドニー）など、その活動実績からこれまでに多数の主要なビエンナーレ・展示に参加。

Untitled (PI3), 2013 oil and archival glue on linen 214 x 300 cm
Courtesy of the Artist and Roslyn Oxley9 Gallery, Sydney

［アーティスト］

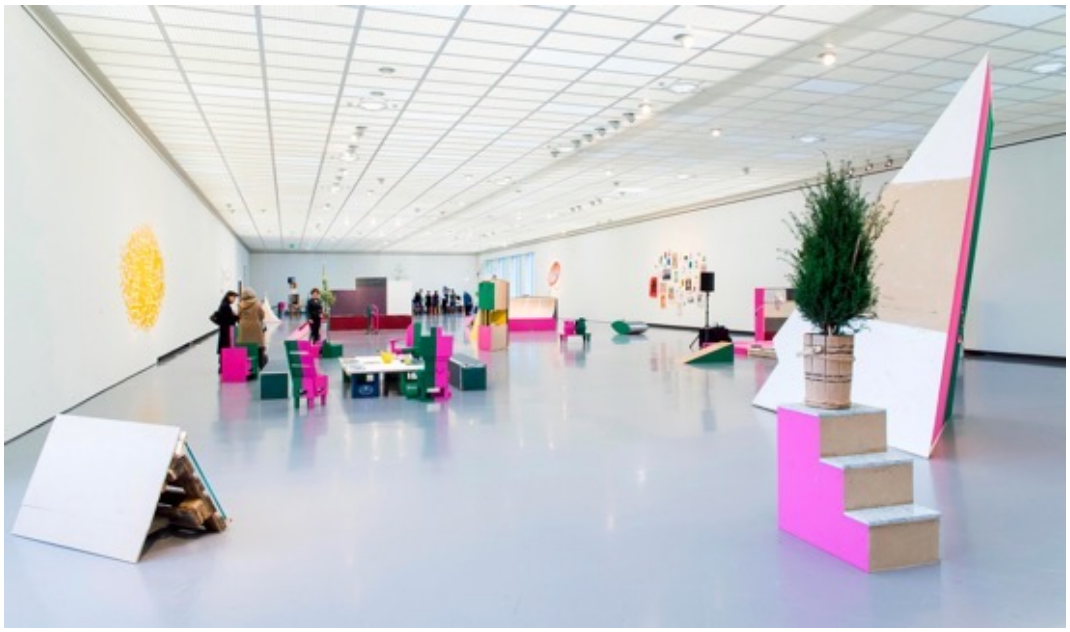
リジア・クラーク
Lygia Clark

1920年 、ブラジル、ベロオリゾンテに生まれる。
1988年 、ブラジル、リオデジャネイロにて没。
30年以上にわたり、芸術の役割と機能を根本的に問い直す作品を手がける。主に絵画、彫刻、パフォーマンス、後に精神分析理論を展開しながら、アーティスト、作品、鑑賞者に対する固定概念の解体を目指した。物理的な交流と感覚的な体験を促す身体的的・有機的な形態を通じて、作品と鑑賞者の関係性に疑問を呈する先駆的な活動を続けた。1940年代に本格的なアート活動を開始し、リオデジャネイロでブラジルのモダニズムの中心人物であったロバート・ブール・マルクスとゼリア・フェレイラ・サルガドに師事。ヨーロッパの絵画、特にパウル・クレーやピート・モンドリアンの作品に傾倒し、1950年から1952年の間パリに移る。そこでフェルナン・レジェとアルパド・スゼンヌの指導の下、最初の油彩画を制作した。ブラジルに帰国後の1954年にグループ・フレンチ（Grupo Frente）に加入し、エリオ・オイチシカやリジア・パペら前衛芸術家たちと交流、展示を行い、1959年には新具体主義（ネオ・コンクレティスム）確立の中心的な担い手となった。新具体主義とは、現実から切り離された厳密で幾何学的な形態を貴ぶコンクリート・アートの台頭から発展し、身体感覚、色彩、表現を通じてより個人的な抽象表現を追求した運動である。1950年代にかけて、内省的・幾何学的な絵画をさらに展開していたが、一方で空間という概念を探求し始めていた。彼女の動的な環境を創出することへのこだわりは、ガッシュ(不透明水彩)画の連作「Planes in Modulated Surface」（1954-58年）で初めて顕在化する。この内省的な作品では形が様々な角度で配置され、構成要素としてのカンバスの重要性が強調されている。またこの頃から、入り込むことができる絵画のような建築模型の制作も始めており、二次元表現を克服することへの意欲を示している。 数年後に制作された連作「Estruturas de Caixas de Fósforos （マッチ箱の構造物）」は、架空のモダニズム建築の模型を思わせる複雑な構造を持った作品である。この時期の制作意図について、クラークは「空間に構成するのではなく、空間を構成したかった」と振り返っている。そして1950年代の終わりに、クラークは絵画から離れた。クラークの空間と構造に対する考え方に影響を与えた亡きモンドリアンへのメッセージとして1959年に書かれた手紙が、この重要な転換期を裏付けている。「私を理解してくれる全ての人々より、貴方はある意味、今の私にとって生きた存在なのです。」1960年代の初めには、有機的な空間・見る人に開かれた場を探ることに着目し、金属と木材による小さな彫刻の連作を発表した。「Bichos（動物）」と名付けられたこの作品は、蝶番のついた金属板を動かして様々な形に変化させることが出来る。どこか虫のような生き物を思わせる本作はクラークにとって、身体的な操作(インタラクション)によって成立する初の参加型作品だった。「これは生き物です」「ここでは二つの生き物の間で身体的対話が生まれます」とクラークは記している。1963年の「Caminhando（歩行）」は、作品としてのオブジェをクラークが称した「提案（proposition）」、つまり、行動とプロセスを経て創造される芸術作品または「行為」（本作の場合、筒状にねじれた紙をハサミで切断すること）へと移行させた画期的な作品だ。「私はこれ以降、参加者による内在的な行為を絶対視しています・・・それは選択、不可測性、そして仮想を具体的な出来事へと変えることを可能にするからです。」クラークは最終的に芸術全般を「放棄」する。1972年にパリのソルボンヌ大学で非言語コミュニケーションの講義を受け持ったことをきっかけに従来の芸術作品の意義に疑問を抱き、1970年代は他者とのインタラクションを巻き込んだ集団的活動や儀式的な交流を展開した。1976年にリオデジャネイロに戻ると、「Estruturacao do self（自己の構造化）」という独自のメソッドを確立。セラピーに用いられるビニール袋やボールに啓発を受け、自身の創作工程を進化させた。最終ステージで向かえたこの転換は、クラークの活動全般における身体の重要性と、芸術の意義を社会的実践に見出した彼女の信念を強調している。開催された個展に、2020年ビルバオ・グッゲンハイム美術館（スペイン）、2020年テート・モダン（ロンドン／ エリオ・オイチシカと合同）、2016年アリソン・ジャック・ギャラリー（ロンドン）、2014年ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク）、2014年ヘンリー・ムーア・インスティトゥート（イギリス・リーズ）、2012年イタウ・カルチュラル・センター（サンパウロ）がある。近年のグループ展では、2021年ポンピドゥー・センター（パリ）、2019年サンパウロ美術館（ブラジル）2019年ニューヨーク近代美術館、2019年カールスルーエ・アート・アンド メディア・センター（ドイツ・カールスルーエ）、2019年世界文化の家（ベルリン）、2018年ガレージ現代美術館（モスクワ）、2018年ブエノスアイレス現代美術館（アルゼンチン）、2018年ブルックリン美術館（ニューヨーク）、2017年ワルシャワの近代美術館（ポーランド）などに出展された。ポンピドゥー・センター国立近代美術館（パリ）、ソフィア王妃芸術センター（マドリード）、ヒューストン美術館（テキサス）、ニューヨーク近代美術館、リオデジャネイロ近代美術館（ブラジル）、サンパウロ近代美術館（ブラジル）、サンフランシスコ近代美術館（カリフォルニア）、テート・モダン（ロンドン）に作品が所蔵されている。

［アーティスト］

アブラハム・クルズヴィエイガス
Abraham Cruzvillegas

1968年、メキシコシティ生まれ。銀河系道教太極拳協会（インターギャラクティック・タオイスト・タイチーソサエティ）の現役メンバー。
クルズヴィエイガスの作品は以下を含む様々な芸術文化施設に出展されている。2022年バス美術館（アメリカ・マイアミビーチ）、2019年ザ・コンテンポラリー・オースティン（テキサス）、2019年アスペン美術館（アメリカ・アスペン）、2019年ホノルル・ビエンナーレ（ハワイ）、2018年MUCACampus（メキシコシティ）、2018年チューリッヒ美術館（チューリッヒ）、2018年シドニー・ビエンナーレ（シドニー）、2017年銀座メゾンエルメスフォーラム（東京）、2016年ニカラグア・ビエンナーレ（ニカラグア）、2015年テート・モダン（ロンドン）、2015年第12回シャルジャ・ビエンナーレ（UAE）、2014年ジュメックス美術館（メキシコシティ）、2014年アンパロ美術館（メキシコ・プエブラ）、2014年ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）、2013年ウォーカー・アート・センター（アメリカ・ミネアポリス）、2012年ドクメンタ13（ドイツ・カッセル）、2011年第12回イスタンブール・ビエンナーレ（イスタンブール）、2010年ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ2010（ソウル）、2009年REDCAT（ロサンゼルス）、2009年第10回ハバナ・ビエンナーレ（キューバ）、2008年CCA現代アートセンター（グラスゴー）、2003年第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ（イタリア）。2016年、ハーバード大学出版局より著作集「The Logic of Disorder」出版。



Kunsthaus, Zurich, 2018
Images from Kunsthaus Zürich
Installation view, Abraham Cruzvillegas,
Autorreconstrucción: Social Tissue, Kunsthaus Zürich, Switzerland, February 16 – March 25, 2018.
Artwork © Abraham Cruzvillegas. Image courtesy Kunsthaus Zürich. Photograph by Nelly Rodriguez.

［アーティスト］

円空
Enkū

江戸時代前期の僧侶、仏師。1632年（寛永9）に美濃国（岐阜県）で生まれる。
幼少期に出家したとされ、その後も白山などで山岳修行を重ねた。30歳前半頃に美濃国を離れ、北海道、東北、関東、畿内などを遊行した。また、1663年（寛文3）までには造像を始め、生涯において10万躯以上を制作したといわれている。1695年（元禄8）に美濃国に戻り、同年7月15日64歳で死去した。円空の彫刻は、一木を粗削りし、造形を大胆に簡略化して彫りだす表現で知られる。彩色や装飾を施さず、木の木質を生かしたその素朴な描写は、庶民的とも評される。初期には、表面を滑らかに整え、伝統的な表現を踏襲した作品も見られるが、次第に鑿痕を残した、力強く抽象的な作風へと変化していった。作風の確立後は、穏やかな表情の微笑仏も多く造像された。円空の大量の造像は、僧侶として、民衆への教化とともに自身の修行の一環でもあったといえよう。

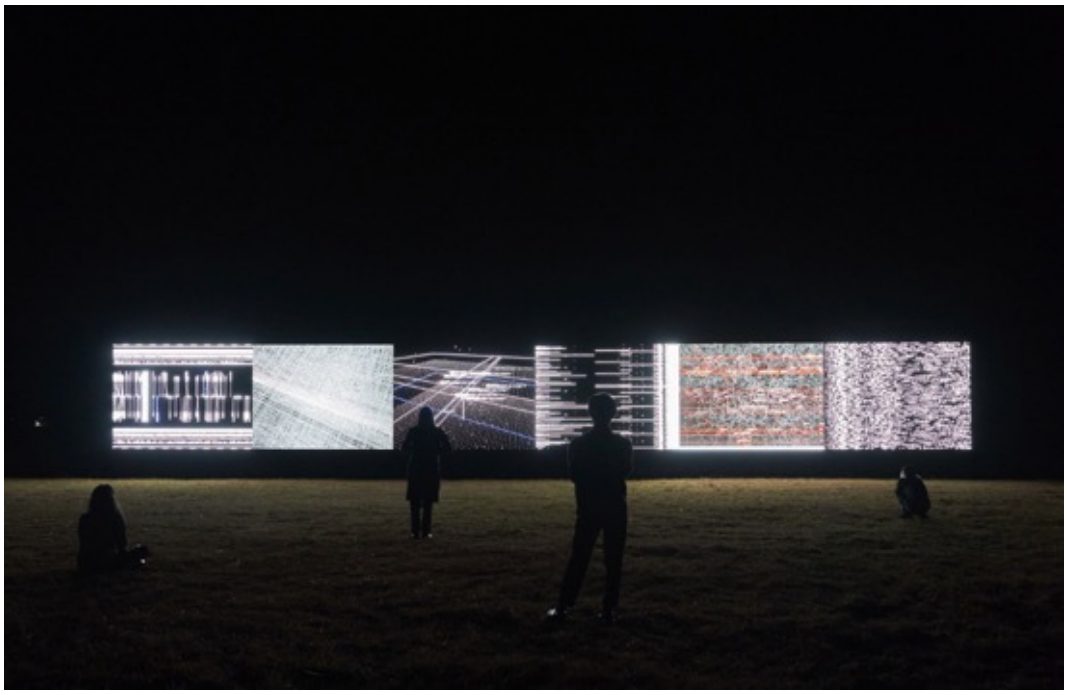
執筆：
横山定　（岡山県立博物館　副館長）
岡﨑有紀　（岡山県立博物館　学芸員）

円空, 地蔵菩薩像, 55.0 cm　林克朗 蔵
Enku, Jizo Bosatsu (Kṣitigarbha), Collection of Katsuro Hayashi

［アーティスト］

池田 亮司
Ryoji Ikeda

1966年、岐阜県生まれ。現在はパリと京都を拠点に活動。
電子音楽の作曲家・アーティストとして国際的に活動し、実験的なアート作品も手掛ける。音、イメージ、物質、物理現象、数学的概念を緻密に編成した没入型のライブパフォーマンスやインスタレーション作品を発表している。2008年以来、ポンピドゥー・センター（パリ）、キャリッジワークス（シドニー）、MONA（オーストラリア・タスマニア島ホバート)、パーク・アベニュー・アーモリー（ニューヨーク）、東京都現代美術館（東京）、コロンビア国立大学美術館（コロンビア・ボゴタ）、カールスルーエ・アート・アンドメディア・センター（ドイツ・カールスルーエ）、アイ・フィルムミュージアム（アムステルダム）、台北市立美術館（台北）、180The Strand（ロンドン）、ファイ・センター（モントリオール）など、世界的に名高い会場で個展を行っている。2022年に弘前れんが倉庫美術館（青森）にて、国内では2009年以来となる大規模な個展を開催。ラルフ・ルゴフがキュレーションを手がけた2019年の第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ「MayYou Live in Interesting Times」では、オーデマ・ピゲコンテンポラリーから委託された長期的なオーディオヴィジュアルプロジェクト「data-verse」が公開された。またこれまでに、バービカン・センター（ロンドン）、ポンピドゥー・センター（パリ）、フェスティバル・ドートンヌ（パリ）、ロサンゼルス・フィルハーモニー（ロサンゼルス）、コンセルトヘボウ（ベルギー・ブルージュ）、メトロポリタン美術館（ニューヨーク）、KyotoExperiment京都国際舞台芸術祭（京都）、ストラスブール音楽祭（フランス・ストラスブール）、ディアギレフ・フェスティバル（ロシア・ペルミ）などで、音響およびオーディオヴィジュアルコンサートを行なっている。2014年、アルス・エレクトロニカのCollide@CERN Award受賞。2020年、第70回芸術選奨文部科学大臣賞（メディア芸術部門）を受賞。



Ryoji Ikeda, data.flux [LED version]audiovisual installation, 2021
https://www.ryojiikeda.com/project/datamatics/#data_flux_LED_version
© ALTERNATIVE KYOTO 2021 Imagination as a Form of "Capital"

［アーティスト］

片山 真理
Mari Katayama

1987年、埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。
自らの身体を模した手縫いのオブジェ、ペインティング、コラージュのほか、それらの作品を用いて細部まで演出を施したセルフポートレイトなど、多彩な作品を制作。アーティストとしての活動に留まらず、歌手、モデル、講演、執筆など、幅広く活動している。作品制作以外の主なプロジェクトとして、2011年より「ハイヒールプロジェクト」を展開。特注の義足用ハイヒールを装着し、ステージに立っている。
主な展示に2021年「home again」(ヨーロッパ写真美術館、パリ)、 2019年「第58回ヴェネチア・ビエンナーレ」(ヴェネチア)、「Broken Heart」(White Rainbow、ロンドン)、2017 年「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」(東京都写真美術館、東京)、「帰途-on the way home-」(群馬県立近代美術館、群馬)、2016 年「六本木クロッシング 2016展:僕の身体、あなたの声」(森美術館、東京)、2013 年「あいちトリエンナーレ 2013」(愛知)など。主な出版物に2019年「GIFT」United Vagabondsがある。
2005年に群馬青年ビエンナーレ奨励賞、2012年アートアワードトーキョー丸の内2012グランプリ、2019年第35回写真の町東川賞新人作家賞、2020年第45回木村伊兵衛写真賞を受賞。

Mari Katayama,possession #2429, 2022 /C-print /©Mari Katayama

［アーティスト］

ミー・リン・ル
My-Linh Le

カリフォルニア州サンノゼ育ち。2000年代初め、10代の頃よりダンスを始める。
サンノゼスタイルのポップダンスを広めたチカーノのグループによって1981年に設立されたPlayboyz Inc.に所属。ベトナム系、メキシコ系、アフリカ系、サモア系、フィリピン系アメリカ人から成るストリートダンサーメンバーと共に活動。世界的なダンスクルーを代表する初の女性ダンサーとして、ワークショップ講師を務める他、ダンスバトルに出場者、また審査員として参加するなど、国際的に活躍している。長年にわたる様々なストリートダンス・コミュニティでの経験は、様々な分野にまたがって活躍するストーリーテラーとしての彼女の活動に大きな影響を与えている。自然に湧き出るダンスの動きを観客から引き出す没入型インスタレーションや、即興ダンスを自己エスノグラフィー的な解釈から探る映像など、リーの作品は、ダンスを単なる表現媒体や形式としてだけではなく、知ることや思い返すこと、相互に関係し繋がること、そして解放と回復のための手法として提示している。2021年、オークランドで結成したターフダンス・グループ「Mud Water Theatre」の作品がGerbode財団の振付部門で特別賞を受賞。また、同グループから名前をとったダンス映像作品「MUD WATER」の脚本・監督を務め、本作は第65回サンフランシスコ国際映画祭（SFFILM）で初上映された。その他の代表作に、2022年「ANIMA」（サンフランシスコ）、2021年「THE ORIGIN STORY OF NO NAME」（サンフランシスコ）、2020年「TRONG NUOC」（アメリカ・テンピ）、2017年「THE REVERSE TURINGTEST」（タイ・チェンマイ）などがある。

My-Linh Le
Mẹ Love You Long Time, 2020
Dance Film, 2 min. 39 sec. Courtesy of the artist ,Videography by Jardy Santiago

［アーティスト］

デヴィッド・メダラ
David Medalla

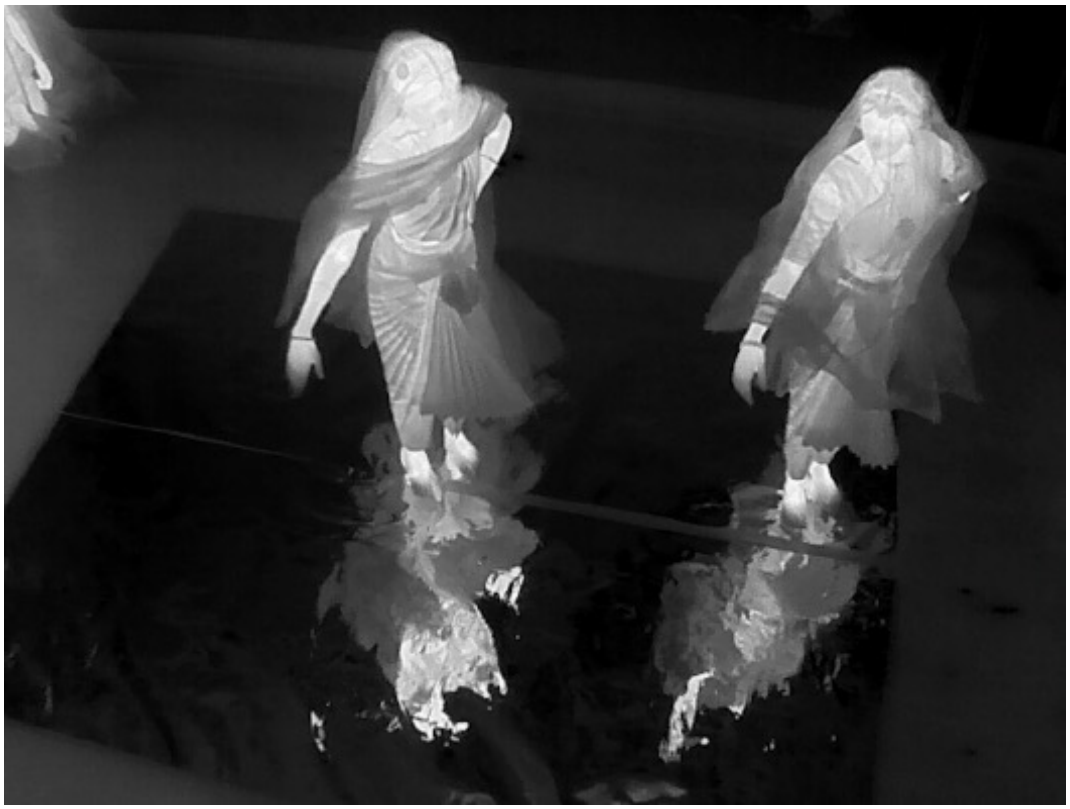
1942年、マニラ生まれ。フィリピン出身の国際的アーティスト。
作品は彫刻やキネティック・アート、絵画、インスタレーション、パフォーマンスアートまで多岐にわたる。生前はマニラのほか、ロンドン、ニューヨーク、パリにも滞在し、芸術活動を行う。アメリカの詩人、マーク・ヴァン・ドーレンの推薦により、12歳でニューヨークのコロンビア大学への入学が認められ、モーゼズ・ハダスの下で古代ギリシャ演劇を学んだほか、現代演劇をエリック・ベントレー、現代文学をライオネル・トリリング、現代哲学をジョン・ランドールに師事し、またレオニー・アダムズによる詩のワークショップにも参加。19世紀および20世紀のヨーロッパの芸術や文学に強く影響を受け、戦後ロンドンの前衛芸術界でも活躍。ロンドンのSignals Gallery (1962年〜64年)での短期ながらも先駆的な取り組みや、実験的パフォーマンス集団「The Exploding Galaxy」(1967年〜68年)で中心的役割を果たし、政治的活動を展開する「Artists forDemocracy」では1974年から1977年にかけて会長を務めた。また芸術家のアダム・ナンカービスと共に1994年に「モンドリアン・ファンクラブ」を、さらに2000年には「ロンドン・ビエンナーレ」を創設し、コラボレーションや交流を主軸とした継続的な活動を展開した。作品は、ハラルド・ゼーマンのキュレーションによる「Weiss auf Weiss」（1966年）、「Live in YourHead: When Attitudes Become Form（邦題：態度が形になるとき）」（1969年）、ドクメンタ5（1972年）などで展示されている。加えて、シドニー・ビエンナーレ、ロンドン・ビエンナーレ、ヨハネスブルグ・ビエンナーレ、第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレなどの国際芸術祭をはじめ、テート・リバプール（リヴァプール）、ポンピドゥー・センター（パリ）、ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）、インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート（ICA）（ロンドン）、セセッション館（ウィーン）、DAADギャラリー（ベルリン）を含む著名な美術館や施設での国際展示にも出展するなど、長年にわたり多数の作品を発表し続けた。2017年には、クリスティーヌ・マセルがキュレーションを務めた第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ企画展「Viva Arte Viva」にて、自身のパフォーマンス作品「A Stitch in Time」の再演および、ナンカービスとの共同作品である「モンドリアン・ファンクラブ」を披露。2020年12月、マニラにて死去。作品のアーカイブはベルリンのanothervacantspace.に収蔵されている。

Cloud Canyons, 1963-2014
Metal, Perspex, Compressors, Timers, Water, Soap 241.3 x 243.8 cm (95 x 96 in.) bubble dimensions variable
image courtesy of kurimanzutto, Mexico City / New York photo: Omar Luis Olguín

［アーティスト］

アジフ・ミアン
Asif Mian

1978年、ニュージャージー州ジャージーシティ生まれ。ニューヨーク州ブルックリン在住。
ドローイング、彫刻、映像、パフォーマンスを交えながら、暴力の作用と知覚を考察した作品を展開。個人的・集団的体験を引き合いに、「交換」「埋め込み」「混成」を通じて日常の物や行為を心理的に転換させている。「イベント・スカルプチャー（出来事の彫刻）」と称して絨毯をつなぎ合わせた立体作品や、威嚇行為をパフォーマンスに変容させた作品、ドローンの赤外線カメラの映像を用いたビデインスタレーションなど、その表現手法は多岐にわたる。2022年「Artadia New York Award」のファイナリストに選出。2020年度「Queens Museum-JeromeFoundation Fellowship」を受賞し、2021年にクイーンズ美術館（ニューヨーク）で個展「RAF:Prosthetic Location」を開催。その他、2019年にはザ・キッチン（ニューヨーク）にてホイットニー美術館のIndependentStudy Program（ISP）が企画した「Always, Already, Haunting, "disss-co,"Haunt」、ザ・シェッド（ニューヨーク）が主催する「Open Call」プログラムや、ブルックリンのBRIC（ニューヨーク）での「Beyond Geographies: Contemporary Art and Muslim Experience」、2018年のクイーンズ美術館の「Queens International: Volumes」など、数々のグループ展で作品が紹介されている。



Asif Mian,Smokeless Fire, 2022 /Director and Artist: Asif Mian / Cinematographer: Alon Sicherman /Performers: Anuka Sethi, Francis Pace Nunes, Noel Cifuentes, xiao xiao sun, Neila Charles, Drew MichaelGardner,Lekha Wood, Arushi Mukherji

［アーティスト］

プレシャス・オコヨモン
Precious Okoyomon

1993年、ロンドン生まれ。現在はニューヨーク市を拠点に活動。
ナイジェリア系アメリカ人詩人およびアーティスト。
作品を通じて、自然界や移住者・人種化の歴史、日常の中に存在する純粋な楽しみを考察している。これまでに、2018年LUMA Westbau（チューリッヒ）、2020年フランクフルト現代美術館（フランクフルト）、2021年Performance Space New York（ニューヨーク）、2021年アスペン美術館（アメリカ・アスペン）で個展を開催。また、第59回ヴェネツィア・ビエンナーレ、第58回ベオグラード・ビエンナーレ（セルビア）に出展するほか、パレ・ド・トーキョー（パリ）、LUMAArles（フランス・アルル）でグループ展に参加。2019年、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリーおよびインスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート（ICA）から委嘱を受け、パフォーマンス作品を発表。2022年、二作目の詩集「ButDid U Die?（でもあなたは死んだの？）」（サーペンタイン・ギャラリーおよびWonder Press刊）を出版予定。2020年LUMA Arlesのアーティスト・イン・レジデンスに参加。2021年「Frieze Artist Award」、2022年「CHANEL Next Prize」を受賞。

Precious Okoyomon“Earthseed,”Exhibition view at the MuseumFür Moderne Kunst, Frankfurt, 2020.
Courtesy of the artist andthe Museum Für Moderne Kunst. Photos by Axel Schneide

［アーティスト］

フリーダ・オルパボ
Frida Orupabo

1986年、ノルウェー、サルプスボルグ生まれ。現在はオスロを拠点に活動。
オルパボの作品は、人種・ジェンダー・性・暴力・まなざし（Gaze）・ポストコロニアリズム・アイデンティティといった題材を、断片的で多種多様な性質のメディアを通して探求している。InstagramやYouTube、Facebook、Tumblrといった画像共有プラットフォームを情報源およびツールに、人種やジェンダーを定義づける画一的かつランダムな画像を大量に用いて、ユーザー生成コンテンツやその不安定な流動的性質が、既存の規範の強化と分断を同時にもたらすという考えに基づき制作を行う。これまでに、2022年ヴィンタートゥール写真美術館（スイス）、2021年アフロ・ブラジル博物館（サンパウロ）、2021年Kunsthall Trondheim（トロンハイム）、2020年ハウス・マルセイユ写真美術館（アムステルダム）、2019年Portikus（フランクフルト）、2019年Kunstnernes Husなどで個展を開催。また、2018年の第58回ヴェネツィア・ビエンナーレおよび2021年の第34回サンパウロ・ビエンナーレに参加したほか、アメリカのビデオアーティスト・映画監督のアーサー・ジャファによる「A Series of UtterlyImprobable, Yet Extraordinary Renditions」展でミン・スミス、Missylanyusと共に作品を発表。同展はストックホルム近代美術館、プラハのルドルフィヌムギャラリー（いずれも2019年）、2018年Julia Stoschek Collection（ベルリン）、2017年サーペンタイン・サックラー・ギャラリー（ロンドン）で開催された。

Carl Henrik Tillberg / Courtesy the artist and Galerie Nordenhake Stockholm/Berlin/Mexico City

［アーティスト］

ヴァンディ・ラッタナ
Vandy Rattana

1980年生まれ。現在は台湾の台北を拠点に活動。クメール・ルージュ後のカンボジアに生まれ、プノンペンで育つ。
穏やかで静的なイメージを通して暴力の歴史を表現する。2005年に写真家としての活動を開始。様々なアナログカメラとフィルム・フォーマットを用いて、厳格なフォトジャーナリズムと芸術的実践の境界をまたがる連作を発表している。近作では、歴史的文献とイメージ構築の関係性をめぐる哲学へ視点を向けている。ラッタナにとっての写真とは虚構の構築物であり、抽象的かつ詩的な表層、かつそれ自身の歴史の語り手でもある。爆弾跡（クレーター）を収めた写真およびドキュメンタリー作品「Bomb Ponds」（2009年）では、1964年から1973年にかけてのアメリカの絨毯爆撃を生き延びたカンボジア人の心の傷を表現。以降、カンボジアの地方の牧歌的な風景をファインダーで捉え、悲惨な過去を暴き続けている。初の短編映像作品「MONOLOGUE」（2015年）を経て、2018年には「FUNERAL」、2019年には「...far away, over there, the ocean」を発表。主な個展は、2020年国立台北芸術大学(台湾)、2018年ギャラリー・シャトー・ドー（フランス・トゥールーズ）、2015年2013年CAPC（フランス・ボルドー）、2013年アジア・ソサイエティミュージアム（ニューヨーク）など。主なグループ展に、2020年釜山ビエンナーレ（韓国）、2019年シンガポール・ビエンナーレ（シンガポール）、2019年ユダヤ博物館（フランクフルト）、2019年山口情報芸術センター（山口）、2019年高雄市立美術館（KMFA)（台湾）、2017年Galerie Faux Mouvement（フランス・メッス）、2017年森美術館（東京・六本木）、2015年東京都現代美術館（東京）、2013年横浜美術館（神奈川）、2012年ドクメンタ13（ドイツ・カッセル）などがある。

MONOLOGUE
Co-Production: Jeu de Paume, Paris and CAPC musé d’art contemporain de Bordeaux © Vandy Rattana

［アーティスト］

バルバラ・サンチェス・カネ
Bárbara Sánchez-Kane

1987年、メキシコ、メリダ生まれ。現在も本地を拠点に活動。
独自に提唱する「macho sentimental（マッチョ・センチメンタル）」の考えに基づき、ジェンダーの枠を超えた作品を通じて、メキシコに対する伝統的なイメージ、およびその女性性や男性性との関係に抵抗する。ファッションデザイン、絵画、パフォーマンス、インスタレーションなどの手法を用いて、不安と恐れ、そして快楽と支配に対する問いを一貫して表現している。主な個展・パフォーマンスに、2022年「sánchezkaneismo」kurimanzutto（メキシコシティ）、2021年「Prêt-à-Patria」（「Siembra」展示企画の一環として）kurimanzutto（メキシコシティ）、2020年「Latino Couture」エコ現代美術館（メキシコシティ）、2019年「MachoSentimental vol. II」パレ・ド・トーキョー（パリ）、2019年「Las Puertas alSentimentalismo」Licenciado Gallery（メキシコシティ）、2018年「Macho Sentimentalvol. I」Grand Tour Studio（ミラノ）、2017年「VastGraveyard of the Missing」Institute ofContemporary Art,Los Angeles（ロザンゼルス）など。
近年の主なグループ展に、2021年「De por Vida」Company Gallery（ニューヨーク）、2021年「en llamas」LLANO（メキシコシティ）、2020年「Otrxs Mundxs」ルフィーノ・タマヨ博物館（メキシコシティ）、2020年「Señora」GalerieMeyer Kainer（オーストリア）、2019年「Prince.sse.s des villes」パレ・ド・トーキョー（パリ）がある。

BarbaraSánchez-Kane,Formando barricadaspara retrasar nuestroadios,2022/
Charcoal onCanvas260 x 303 cm/ Photo:Kurimanzutto

［アーティスト］

笹本 晃
Aki Sasamoto

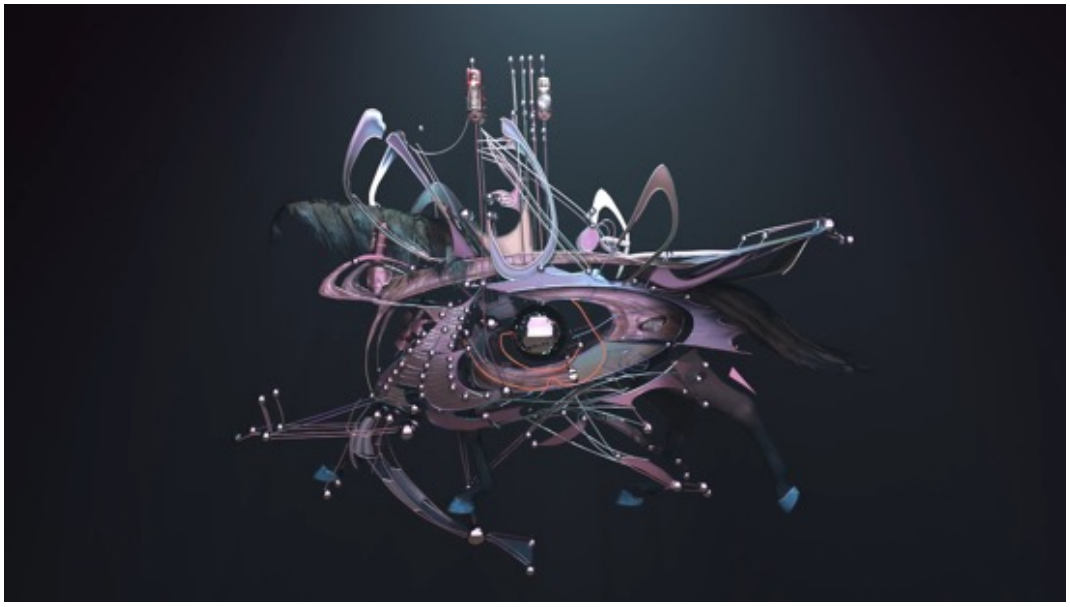
1980年、神奈川県生まれ。現在はニューヨークを拠点に活動。
笹本はパフォーマンス、彫刻、ダンス、映像作品などを手がけ、ニューヨークをはじめ世界各国のパフォーミングアーツやビジュアルアートの美術館・ギャラリー・施設などで作品を発表している。ミュージシャン、振付師、科学者、学者など幅広い分野の人間とのコラボレーションも多数展開し、自他の作品のなかでダンサー、彫刻家、ディレクターとして様々な役割を演じている。笹本のパフォーマンス／インスタレーション作品は、何気ない、ありとあらゆるしぐさを中心に展開している。彫刻的に編集した物（ファウンド・オブジェ）を緻密に構成したインスタレーション、また即興パフォーマンスで展開する大胆な身振りがフィードバックを生み、音や物、身体動作と呼応する。そこで組み立てられた物語は一見すると個人的なものに見えるが、奇妙なまでにさまざまなアクセスや関係性、考察への可能性が開かれている。主な個展に、2017年「Yield Point」ザ・キッチン（ニューヨーク）、2016年「DelicateCycle」スカルプチャー・センター（ニューヨーク）がある。主なグループ展に、2022年の国際芸術祭「あいち2022」（愛知）、2022年の第59回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2021年ロッテルダム芸術ホール（オランダ・ロッテルダム）、2021年UCCA Edge（上海）、2018年大館（香港）、2017年レイキャビク美術館（アイスランド・レイキャビク）、2017年の第9回恵比寿映像祭（東京・恵比寿）、2016年の第3回コチ=ムジリス・ビエンナーレ」（インド・コチ、2016年）、2016年の第11回上海ビエンナーレ、2015年の堂島リバービエンナーレ2015（大阪）、2015年のParasophia:京都国際現代芸術祭2015（京都）、2014年のHigh Line Art（ニューヨーク）、2013年森美術館（東京・六本木）、2012年の光州ビエンナーレ（韓国・光州）、2010年MoMA PS1、（ニューヨーク）、2010年のホイットニー・ビエンナーレ2010（ニューヨーク）、2008年の「横浜トリエンナーレ2008（神奈川）など。

Aki Sasamoto,“Past in a future tense, Table 1”, 2019/Hand-blown glass, whiskey glass, HVAC system, centrifugal fan, speed control, red oak, iron table base, paper receipt 327.7 x 426.7 x 238.8 cm/ ©Aki Sasamoto.
Courtesy of the artist and Bortolami, New York and Take Ninagawa, Tokyo./Photo by John Berens

［アーティスト］

ジャコルビー・サッターホワイト
Jacolby Satterwhite

1986年、サウスカロライナ州コロンビア生まれ。
サッター―ホワイトは労働、消費、肉欲、想像などのテーマを、没入型インスタレーション、バーチャルリアリティ、デジタルメディアを通して提起するコンセプチュアルな創作活動で知られる。様々なソフトウェアを駆使して複雑かつ緻密なアニメーション／実写映像を制作し、現実リアルと空想が絡み合った世界観を表現。アーティストや彼の友人がアバターとして登場し、イラスト、パフォーマンス、絵画、彫刻、写真、テキストなど作家が手がける多様な表現を融合させている。クィア理論、モダニズム、ビデオゲーム言語などを幅広く参照し、個人的・政治的な観点から従来の西洋美術の概念に立ち向かう。また亡き母、パトリシア・サッターホワイトからも強い影響を受けており、パトリシアが想像した日用品のスケッチ、そして軽妙な歌声をインスピレーションに、記憶と伝承という複雑な構造を編んでいる。メリーランド・インスティテュート・カレッジ・オブ・アート（ボルチモア）で美術学士号を、ペンシルベニア大学（フィラデルフィア）で美術修士号を取得。多数の国際的な展示や芸術祭で発表しており、近年の主な展示に2022年FRONT International（アメリカ・クリーブランド）、2021年ミラー・インスティテュート・フォー・コンテンポラリー・アート（ペンシルベニア）、2021年ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）、2021年光州ビエンナーレ（韓国・光州）、2021年ウェクスナー芸術センター（オハイオ）、2019年ファブリック・ワークショップ＆ミュージアム（フィラデルフィア）、2019年パイオニア・ワークス（ニューヨーク）、2019年ホワイトチャペル・ギャラリー（ロンドン）、2019年ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク）、2019年ミネアポリス美術館（ミネアポリス）、2018年シカゴ現代美術館（シカゴ）、2018年フォンダシオンルイ・ヴィトン（パリ）、2017年ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）、2017年パブリック・アート・ファンド（ニューヨーク）、2017年サンフランシスコ近代美術館（サンフランシスコ）、2017年インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート（フィラデルフィア）など。2016年にフランシー・ビショップ・グッド＆デヴィッド・ホルヴィッツ・米国アーティスト・フェローシップを受賞。作品はヘルシンキ現代美術館キアズマ（ヘルシンキ）、ニューヨーク近代美術館、ハーレム・スタジオ美術館（ニューヨーク）、ホイットニー美術館（ニューヨーク）などに所蔵されている。2019年にソランジュ・ノウルズのヴィジュアルアルバム「When I Get Home」を共作。



Jacolby Satterwhite, *still from Birds in Paradise*, 2019
2-channel HD color video and 3D animation with sound ,RT: 18:30 min.
© Jacolby Satterwhite
Courtesy of the artist and Mitchell-Innes & Nash, New York

［アーティスト］

島袋 道浩
Shimabuku

1969年、神戸市出身。現在は那覇市を拠点に世界各地で活動。
1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、その場所やそこに生きる人々の生活や文化、新しいコミュニケーションのあり方に関する映像、彫刻、パフォーマンス、インスタレーション作品などを制作。その作品は時に生き物と人間との関係にも及ぶ。詩情とユーモアに溢れながらもメタフォリカルに人々を触発するような作風は世界的な評価を得ている。主要な国際展にも数多く参加しており、その中には第５７回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2017年）、第１４回リヨン・ビエンナーレ（2017年）、第１２回ハバナ・ビエンナーレ（2015年）、第9回台北ビエンナーレ(2014)、第１１回シャルジャ・ビエンナーレ（2013年）、第２７回サンパウロ・ビエンナーレ（2006年）、リバプール・ビエンナーレ（2006年）、第１１回ビエンナーレ、シドニー(1998年)などがある。主な近年の個展としては、ウィールス現代アートセンター、ブリュッセル、ベルギー（2022年)、モナコ国立新美術館（2021年）、クレダック現代アートセンター、イブリー、フランス（2018年）、クンスト・ハーレ・ベルン、スイス（2014年）、アイコン・ギャラリー、バーミンガム、U.K.（2013年）などが挙げられる。

Shimabuku, Swan goes to the Sea, 2014 / Performance view: “Imagineering” Okayama Art Project / ©Shimabuku / Collection of Ishikawa Foundation / Courtesy of the artist

［アーティスト］

曽根 裕
Yutaka Sone

1965年生まれ。中国、メキシコ、ベルギー、日本にて活動を行う。
主な個展に2017年「Obsidian」四方当代美術館（南京）、2016 年「Day and Night」デイヴィッド・ツヴィルナー（ ニューヨーク）、2011 年「Perfect Moment」東京オペラシティアートギャラリー、2006年「Like Looking for Snow Leopard」クンストハーレ・ベルン、2002年「ダブル・リバー島への旅」豊田市美術館（愛知）など。主なグループ展に2019年「東京インディペンデント」東京藝術大学大学美術館陳列館（東京）、2018 年「Sanguine: Luc Tuymans on Baroque」プラダ財団（ミラノ）、2004年ホイットニービエンナーレ（ニューヨーク）、2003年「ヘテロトピアス（他なる場所）— 曽根裕 小谷元彦」第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館、2001 年「EGOFUGAL」第7 回イスタンブール・ビエンナーレ、1997-1999年「移動する都市」（ウィーン、
ボルドー、ニューヨーク、フムレバク、ロンドン、バンコク、ヘルシンキ）、1997年ミュンスター彫刻プロジェクトなど。

Amusement Romana, 2002
wood, paint, FRP, H400×W1650×D1025cm
Collection: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Photo: Keizo Kioku
Courtesy: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

［アーティスト］

アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong Weerasethakul

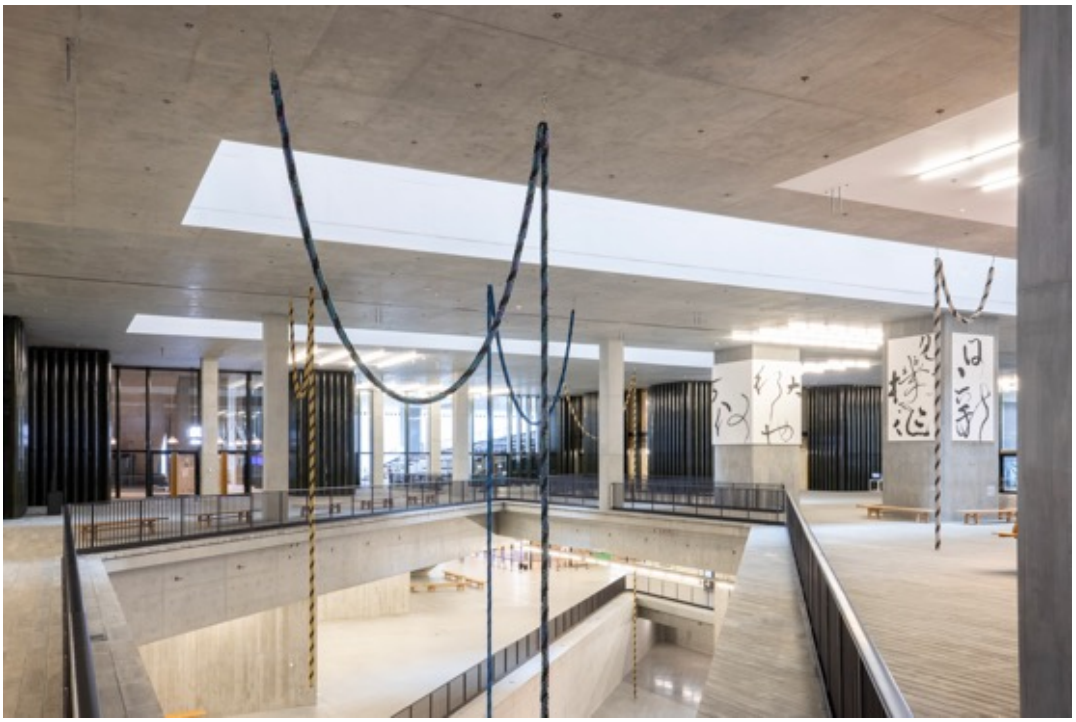
1970年バンコクに生まれ、タイの東北部コーンケンで育つ。現在チェンマイに主な拠点を置く映画監督、アーティスト。
2010にはカンヌ映画祭の最高賞のパルム・ドールを『ブンミおじさんの森』にて受賞、2021年に公開された最新作の『MEMORIA メモリア』は同審査員賞を受賞している。アートの分野でも高い評価を得ており、2011年の横浜トリエンナーレをはじめ、2012年のドクメンタ13、2013年にシャルジャ・ビエンナーレ、2019年のベニスビエンナーレなど多数の国際展に参加。2015年には映像をつかった初の劇場作品“Fever Room”を発表し各地で上演、2022年あいちトリエンナーレでは初のVR作品を発表する予定で活動の幅をさらに広げている。

Apichatpong Weerasethakul, Fireworks(Archives), 2014 / © Apichatpong Weerasethakul

［アーティスト］

梁慧圭（ヤン・ヘギュ）
Haegue Yang

1971年、ソウル生まれ。現在はベルリンとソウルを拠点に活動。
ヤン・ヘギュの表現はコラージュ、キネティック・スカルプチャー、空間インスタレーションなど幅広いメディアにおよび、作家独自の視覚表現を通して異なる歴史と伝統を繋ぐ。ブラインドや鈴、韓紙（ルビ：ハンジ）（楮[こうぞ]の樹皮から作られた韓国の伝統手漉き紙）、人工藁やレンガなど、様々な工法や素材とそれらが有する文化的な意味合いを扱っている。多感覚に訴える没入型インスタレーションは、視覚を越えた先の知覚を触発し、労働、移民、難民の問題に美学的見地から切り込んでいる。一貫して不定形かつ個人化されたレファレンスからは、統一的なナラティブではなく流動性に立脚した彼女の視点が見て取れる。
2018年ヴォルフガング・ハーン賞受賞。これまでに、2022年コペンハーゲン国立美術館、2020年オンタリオ美術館（トロント）、2020年テート・セント・アイヴス（イギリス・セントアイヴス）、2020年国立現代美術館（ソウル）、2019年ニューヨーク近代美術館、2018年ルートヴィヒ美術館（ケルン）、2016年ポンピドゥー・センター（パリ）、2015年サムスン美術館リウム（ソウル）、2012年ハウス・デア・クンスト（ミュンヘン）、2009年の第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ韓国館など、世界的機関で個展を開催している。



Haegue Yang,“Sonic Rescue Ropes”, 2022/ Commissioned by M+, 2022/ © Haegue Yang/Photo: Lok Cheng, M+, Hong Kong

［イベント］

ペパーランド
PEPPERLAND

ライヴハウスという存在が全国でも珍しかった黎明期の1974年に設立。
アンディ・ウォーホルの映像作品に登場する「エクスプローディング・プラスティック・イネヴィタル」のような場所をつくろうとスタートし、岡山にライヴ文化を定着させた老舗である。設立当時から音楽と共に映画、演劇、講演会、ポエトリー・リーディング…など、あらゆる文化領域を横断・接続・混淆する活動を重視してきた。次の時代のビジョンを連れてくる最も早いメディアが音楽であり、ジャンルにこだわらず若い感覚に宿る衝動を尊重し、受け止め、深め育てる姿勢を貫き通している。音楽を通じて「社会彫刻」するシチュアシオニスト的活動を尊重し、店内にはヨーゼフ・ボイスのシャツとサイン入り写真が展示されているライヴハウスは類例をみない。

Photo byLive House PEPPERLAND

［イベント］

ゲルト・ロビンス
Gert Robijins

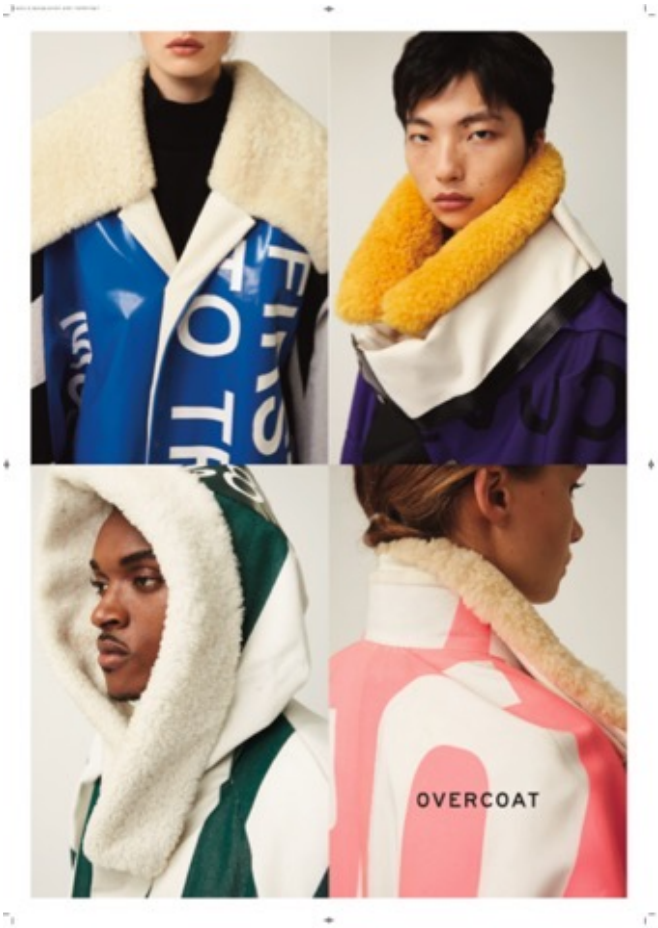
1972年、ベルギー、シント＝トロイデン生まれ。現在は同国ボルフローンを拠点に活動。
見慣れた物を大掛かりなオブジェや異様なものに変化させるなどし、奇抜な構造物を制作。日常的な物体から既存の枠組みを取り除くことで物の文脈から日常性を解体し、同時にその表面下に潜む詩情的な特性の前景化を図る。過去10年間にわたり、（社会的）景観の再生と再評価を主軸とする「RESET」シリーズプロジェクトを各地で展開している。2010年に白色木材と金属で生まれ故郷の小さな町、ゴーテムの複製を制作し、75:100の縮尺で教会や牧師館を再現。以来、リンブルフ地域の炭鉱の歴史を振り返る「Reset Charbon」や、世界各地で仮設の構造物を建てフリースペースとして活用する「Reset Mobile」などさまざまなプロジェクトを発表し、「RESET」のコンセプトを追求している。
1992年〜1996年までブリュッセルのLUCAスクール・オブ・アーツで学んだのち、オランダ・マーストリヒトのヤン・ファン・エイク・アカデミーの芸術学科で研究活動を続ける。その後、ニューヨークのMoMA PS1やベルリンのクンストラーハウス・ベタニエンでアーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加。2001年よりベルギー・ゲントの王立芸術アカデミーで客員講師を務める。
現在、トミー・シモンズ・ギャラリー（アントワープ）に所属。

Reset Mobile (Yellow), 2020
Rib Stop, Ropes, Metal beams 200 x 520cm
Courtesy the artist and Tommy Simoens, Antwerp

［グループ］

オーバーコート
OVERCOAT

OVERCOAT(オーバーコート）はNY在住の大丸隆平(1977年福岡生まれ)が2015年に創立したファッションブランド。「Wearing New York （ニューヨークを着る）」というコンセプトで、特にショルダーラインに工夫が凝らされており、サイズ、ジェンダーそしてエイジからも解放されたものづくりを目指している。コレクションは日米を中心とする主要百貨店やコンセプトストアで展開され、アート業界などクリエーティブ層からの支持も高い。



［グループ］

伊勢﨑州（備前焼）・スミス 一三省吾・木口 ディアンドレ（烏城彫）
Shu Isezaki（Bizen）・Smith Ethan Shogo・De'Andre Kiguchi（Ujo Bori）

伊勢崎州 1996年生まれ 岡山県にて活動
備前焼は岡山県備前市を代表的な産地とする。釉薬を用いることなく高温の酸化焔焼成によって焼き締める手法が特徴とされる。日本六古窯のなかで最も古い歴史を有する備前焼はルーツを古墳時代に遡るという。伊勢崎州は備前焼の作家、伊勢崎競を父とし、海外留学や調理師学校での経験を積んだ後、父の窯にて修行を始めたばかりである。

スミス 一三省吾・木口 ディアンドレ（烏城彫）
スミス一三省吾 1998年生まれ 岡山県にて活動
木口ディアンドレ 1998年生まれ 米国に生まれ岡山県にて活動
烏城彫とは1925年、彫刻家の木口九峰によって始められた木彫。繊細な彫りと写実的な表現を特徴とする漆器工芸品である。烏城彫の名称は、岡山城の別名を「烏城」ということに由来して木口自らと名付けたという。分業による高い技術力で作りだされる烏城彫は、岡山の誇る特産品となっている。木口ディアンドレとスミス一三省吾は若い烏城彫職人として伝統と現代の融合に取り組んでいる。

［パフォーマンス］

Untitled Band (Shun Owada and friends)

大和田俊を中心に、木村匡孝、曽根裕、村岡充らアーティストで構成されるバンド。
曽根裕の声かけにより、2021年秋に岡山で結成。

© Yutaka Sone Studio

アクセス（JR岡山駅まで）

東京から
■飛行機　［羽田空港］ ANA・JAL10便/日(約1時間20分)
　※岡山空港～JR岡山駅　リムジンバス（約30分）
■新幹線　［JR東京駅］のぞみ（約3時間20分）
■バス　［東京］夜行バス（約10時間）

名古屋から
■新幹線　［JR名古屋駅］のぞみ（約1時間36分）
■バス　［名古屋］高速バス（約5時間20分）

京都から
■新幹線　［JR京都駅］のぞみ（約1時間）
■バス　［京都］高速バス（約3時間30分）

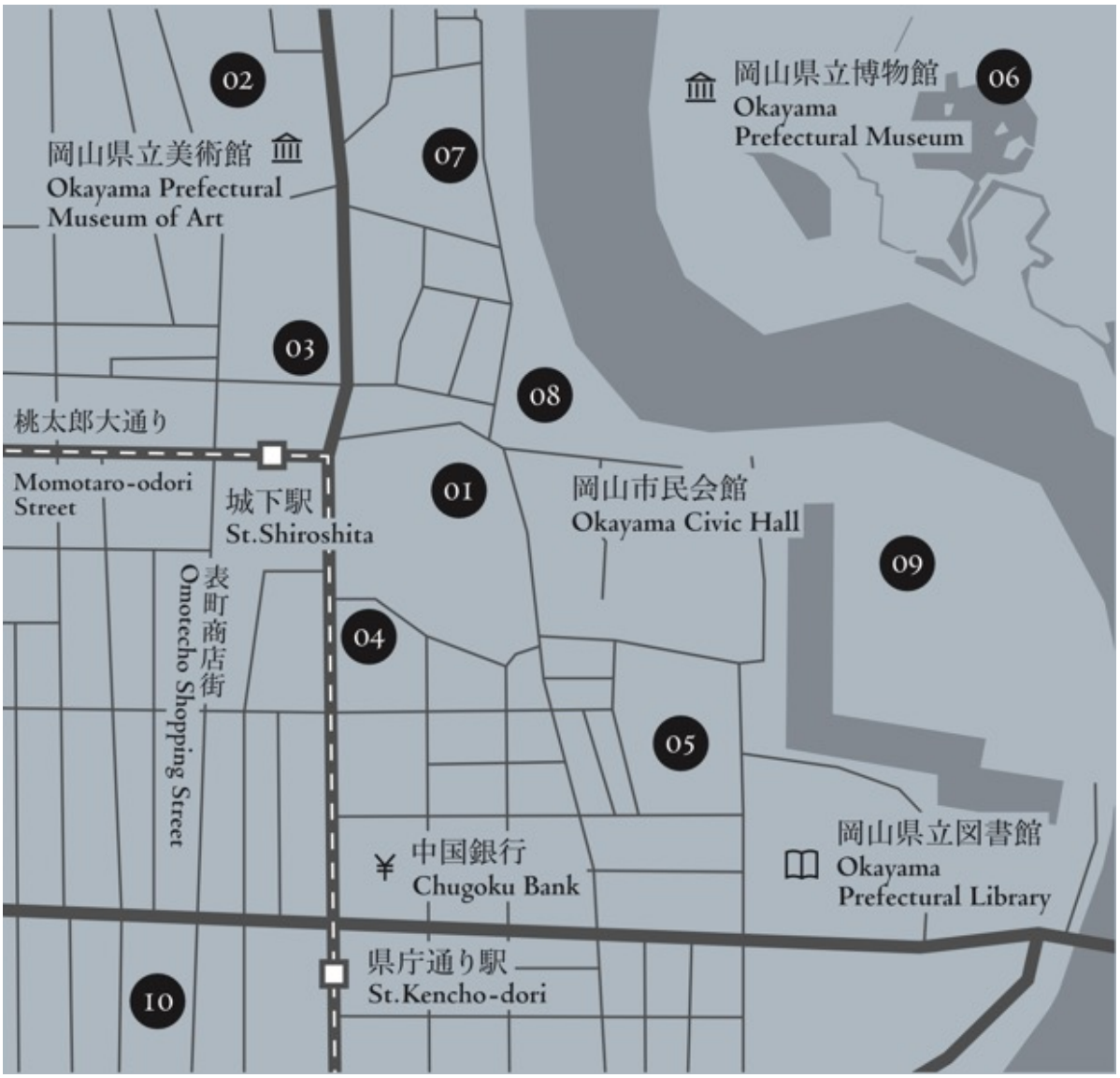
広島から
■新幹線　［JR広島駅］のぞみ（約40分）
■バス　［広島］高速バス（約2時間30分）

福岡から
■新幹線　［JR博多駅］のぞみ（約1時間43分）
■バス　［福岡］高速バス（約8時間50分）

沖縄から
■飛行機　［那覇空港］JTA（約1時間10分）
　※岡山空港～JR岡山駅　リムジンバス（約30分）

JR岡山駅から会場までのアクセス
■徒歩 15-20分
■バス・タクシー 5-10分
■路面電車 東山線「城下」電停下車、徒歩4分

会場



01 旧内山下小学校
（岡山市北区丸の内1-2-12）

02 岡山県天神山文化プラザ
（岡山市北区天神町8-54）

03 岡山市立オリエント美術館
（岡山市北区天神町9-31）

04 シネマ・クレール丸の内
（岡山市北区丸の内1-5-1）

05 林原美術館
（岡山市北区丸の内2-7-15）

06 岡山後楽園
（岡山市北区後楽園1-5）

07 岡山神社
（岡山市北区石関町2-33）

08 石山公園
（岡山市北区石関町7）

09 岡山城
（岡山市北区丸の内2-3-1）

10 岡山天満屋
（岡山市北区表町2丁目1-1）

会場

01 旧内山下小学校
（岡山市北区丸の内1-2-12）

02 岡山県天神山文化プラザ
（岡山市北区天神町8-54）

03 岡山市立オリエント美術館
（岡山市北区天神町9-31）

04 シネマ・クレール丸の内
（岡山市北区丸の内1-5-1）

05 林原美術館
（岡山市北区丸の内2-7-15）

06 岡山後楽園
（岡山市北区後楽園1-5）

会場

07 岡山神社
（岡山市北区石関町2-33）

08 石山公園
（岡山市北区石関町7）

09 岡山城
（岡山市北区丸の内2-3-1）

10 岡山天満屋
（岡山市北区表町2丁目1-1）

鑑賞券

［鑑賞券　券種・価格」

区分	一般	一般 (県民)	学生	65歳 以上	団体 (8名以上)	単館	高校生 以下
前売券	1,000円						
当日券	1,800円	1,500円	1,000円	1,300円		500円	無料

［前売引換券販売場所］

岡山芸術交流ウェブサイト（オンライン購入）
チケットぴあ（Pコード 686-195）
ローソンチケット（Lコード 63436）
ArtSticker（アプリ・webでのオンライン購入）
日本旅行岡山支店HP
山陽新聞社サービスセンター
ぎんざや
てんまやバスステーションチケットセンター
ホテルグランヴィア岡山

問い合わせ先：株式会社日本旅行岡山支店 ＴＥＬ：086-225-2040

※高校生以下で学生証をお持ちの方、障がい者手帳・療育手帳等をお持ちの方とその付添いの方1人、
　その他、実行委員会が必要と認めた方は無料
※前売引換券は、会期中に会場で鑑賞券で引き換え
※入館当日のみ再入場可能

パブリックプログラム

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、市民・県民が展覧会により親しんでもらうための各種プログラムを実施。展覧会への来場のきっかけづくりとしての役割も担うプログラムとして、本展会場以外の場所においても広く開催します。

パブリックプログラムディレクター　木ノ下智恵子監修。

1．芸術交流の基盤整備に関するシンボルイベント

事業	開催日時	出演者等	場所	参加人数
「Artists Talk」 参加アーティストが一堂に会するトークイベント	9月30日（金） 14：00-15：30	リクリット・ティラヴァーニャ （アーティスティックディレクター） 他10名程度	岡山県立美術館	100人程度
「クロージングイベント」 ゲストと各地の国際展・芸術祭の課題や可能性について語り合います。	11月27日（日） 17：30-19：30 （予定）	調整中	調整中	70人程度

2．本展テーマ、アーティスト、作品の拡張プログラム

事業	内容
ジャーナルプロジェクト	学生グループが、岡山芸術交流を独自の視点で取材し、作成した壁新聞を表町商店街に掲示します。
岡山芸術交流紹介動画	小学生用に岡山芸術交流や現代アートの魅力を分かりやすく伝える動画を作成。大人も楽しめる内容です。
アーティストインタビュー動画	参加アーティストたちの思いや制作姿勢、岡山の印象など、ここでしか聞けない話を公開しています。
一般公募企画	岡山芸術交流を一緒に盛り上げていただく企画を一般募集。トークイベントやワークショップなど。

3．鑑賞支援（幅広い層の方々にアートの楽しみ方を知ってもらい、作品への理解を深めてもらうための鑑賞ツアーを実施）

事業	内容	開催日時	参加人数
「みる×対話」鑑賞ツアー	参加者全員で対話による鑑賞を楽しむプログラム	10月9日（日）、10日（月・祝） 午前・午後	各回15人
子どもナビと楽しむアートツアー	小学生がナビゲーター役となり、対話による鑑賞を楽しむプログラム	事前ワークショップ 10月16日（日）、11月5日（土） ツアー 11月6日（日）午前・午後	各回15人

岡山芸術交流 実行委員会 事務局
〒700-0823 岡山市北区丸の内2-1-1

お問い合わせ
e. info@okayamaartsummit.jp
w. www.okayamaartsummit.jp/2022/
p. 086-221-0033
f. 086-221-0031

取材/広報用画像について
e. press@okayamaartsummit.jp